

平成 21 年 5 月 26 日現在

研究種目：基盤研究 (C)

研究期間：2006～2008

課題番号：18520256

研究課題名 (和文) 日中戦争期における香港文学者と日本・中国文学者の関係図

研究課題名 (英文) The Attitude of Hong Kong novelists and poets in 1930s and 1940s towards Japanese and Chinese Literature

研究代表者

西野 由希子 (NISHINO YUKIKO)

茨城大学・人文学部・准教授

研究者番号：40262357

研究成果の概要：本研究では、日中戦争期とその前後の時期、つまり 1930 年代から 1940 年代、日本、中国、香港の文学者がどのように交流し、創作を行ったか、特に香港での交流を中心に、資料を収集し、整理を行った。研究の対象を詩人や詩の創作に絞り、日本の文学者では詩人の草野心平を軸に研究と考察を行った。またこの時期に上海から香港に移り住み、創作活動を行った「現代派」の詩人・戴望舒について、作品の手法・技法という面での影響だけでなく、文学者としての精神や彼の行動、存在が後の香港の文学者にとって重要な意味を持ったことを確認した。香港における詩の創作のその後の展開については研究を継続し、まとめていきたいが、日中戦争期の香港における文学者の交流、状況を明らかにすることで、「文学空間」としての香港の意味がより詳細に見えてきたと考えている。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2006 年度	1,800,000		1,800,000
2007 年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2008 年度	700,000	210,000	910,000
年度			
年度			
総計	3,500,000	510,000	4,010,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学、各国文学・文学論

キーワード：香港文学、中国近現代文学、日本近代文学、日中交流史

1. 研究開始当初の背景

日中戦争期の文学状況、作家の研究は、中国文学研究においてもこれまでさまざまな先行研究があるが、特に「香港」を中心に置き、この地で香港、日本、中国の作家がどのように交流を行い、それがその後の香港文学にどのような影響を与えたか、という視点からの研究は十分になされてきたとは言えない。

研究代表者はこれまで 1930 年代に上海で活動した「現代派」作家－施蛰存・穆時英・戴望舒らの研究を続けており、また香港文学の研究も並行して行ってきた。

それらの研究の発展として、1930 年代から 40 年代にかけて、中国や日本でのそれぞれの文学者たちの交流を広く視野にいれながら、特に香港における作家の活動、交流の諸相を調査し、考察する本研究に取り組んだ。

2. 研究の目的

これまで中国文学研究、日本文学研究がそれぞれに取り組んできた日中戦争期の作家に関する先行研究を参考にしながら、特に「香港」という文学空間において、香港、中国、日本の文学者がどのように交流し、創作活動を行ったか、基礎的な資料を調査、収集した。それらのデータを整理し、資料を追加しながら関係資料目録（データベース）を作成していくことにした。

調査によって得られた資料から、当時の文学状況を分析し、作家たちの関係を立体的に明らかにするとともに、香港文学史のその後の展開にどのような影響を与えたのかを考察し、まとめていくことを目的とした。

3. 研究の方法

香港、中国、日本の文学者の日中戦争中の活動、交流の状況を明らかにするために資料の調査、収集を行った。

2006年8月、2008年2月、2008年4月に香港での調査を行い、香港大学図書館の資料、特に同館の香港スペシャルコレクション所蔵の新聞、雑誌、書籍等を閲覧し、データの収集を行った。

また2007年3月には上海、北京でも上海図書館、中国国家図書館等で調査を行い、関連の文献や先行研究について調査、確認した。

日本の詩人の活動や作品、資料に関しては、いわき市立草野心平記念文学館や日本現代詩歌文学館（北上市）等で調査を行った。

そのほかに、国内外の図書館、資料館等がホームページで提供しているデータベースや資料検索、論文コピーサービスなどを利用した。

一年目から二年目にかけて行った調査の結果を分析し、先行研究等に学ぶ中で、香港、中国、日本の文学者のうち、特に詩人たち、詩の創作活動の分野において注目すべき交流が見られること、また香港文学史の上でも、詩の創作を中心に、中国、日本の作家との交流や彼らから受けた影響について考えて行きたい気持ちが強まったので、その部分に焦点を絞りながら、調査を続けることとした。

本研究の鍵となる作家の一人が、「現代派」（「中国新感覚派」）として上海で活動し、日中戦争期、香港に移って生活、活動した戴望舒である。その友人の施蛰存も、戴望舒を訪ねて短期間であるが、香港に滞在している。戴望舒、施蛰存が香港で書いたもの、香港について書いたものなどを読みなおし、彼らの創作生涯において、香港での生活、文学活動がどのような意味を持つことになったかということについて考えて行くことにした。こ

れまで知られていない作品の存在がないかどうかということも調査した。

また彼ら「現代派」の創作や存在がその後、どのように香港で受け止められ、香港の詩や文学の展開につながっていったかという点も考察していきたいと考えた。小説の分野では、実験小説を書く香港の作家・劉以鬯、西西等の作品を中心に分析し、「現代派」の影響、あるいは香港作家の独自性を考えることにした。また詩においては、詩人であり、比較文学研究者・香港文化の研究者である也斯（梁秉鈞）の詩や詩論の分析を行い、彼の創作活動を通して、香港における詩の創作を見て行くことにし、特に1930年代から1940年代の日本、中国、香港の作家たちの交流や関係、それぞれの創作活動が香港の詩にとってどのような意味を持つか、なんらかの影響を与えているのかどうかという点に着目していくこととした。

4. 研究成果

(1) 調査で得られたデータは、資料目録と年表の形で整理を行っており、資料を補充・修正しながら公開し、この分野の研究に資したい。1930年代から40年代、つまり日中戦争期およびその前後の時期、中国と日本の文学者がどのように香港を訪れ、滞在し、活動・交流したか俯瞰することができ、「文学空間」としての香港の位置を明らかにしていく上で意味を持つ資料となるものと考えている。

(2) 中国の文学者と日本の文学者の交流については、まずは草野心平を軸として、資料の収集、考察を行っていった。

草野にとって中国での日々、中国人の友人との友情は貴重なものであり、それは彼にとって終生変わっていないが、そのことによって引き受けることになった自分の立場が結果的に矛盾したものであったことについて、彼はきちんとした決着をつけなかったように思われる。それは本人だけの問題ではなく、戦争中の日本のほとんどの文学者に通じる問題点であると指摘したい。

表1 草野心平と中国、関連年表（簡易版）

1921年1月、香港経由で広州へ。9月、嶺南大学に入学。12月、文学研究会・広東支部、（梁宗岱、劉燧元ら）が機関誌《文学》を刊行。草野も参加する。
1925年4月、《銅鑼》を発行。黄瀛も参加する。7月、草野、日本に帰国。黄瀛を通して、高村光太郎、宮沢賢治と知り合う。
1938年11月、中国を訪問。
1940年5月、嶺南大学の同級生・林柏生が来

日し、草野と会う。8月、南京政府宣伝部顧問として南京へ。

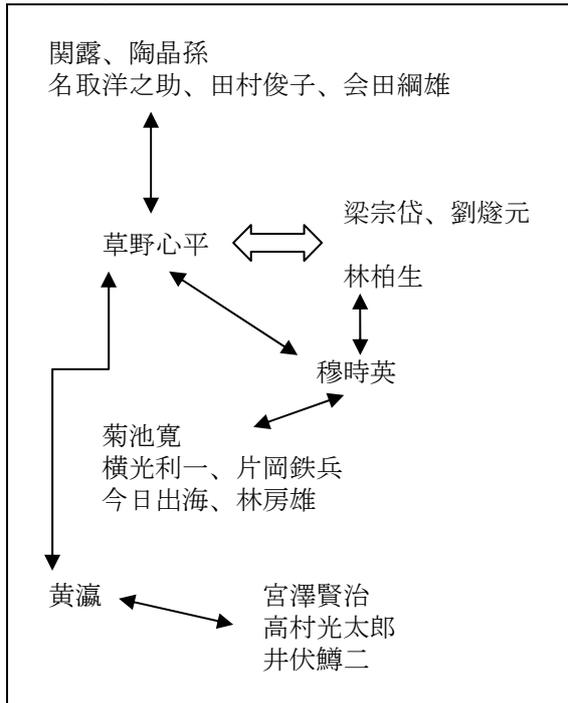
* 関露、陶晶孫、名取洋之助、田村俊子、会田綱雄らとの交際

* 大東亜文学者大会

* 中国で草野が関わった雑誌：《風雨談》《長江文学》《上海文学》《黄鳥》《中日文化》

1945年、敗戦により集中營で生活し、日本に帰国。《歷程》に復帰。

図1 草野を中心とした日本・中国の文学者たちの関係図



このほかに、この時期の日本の文学者と中国の文学者の交流という点で、また短期間ながら香港滞在時期があるということから、詩人・雷石楡（1911-1996）についても資料の調査を行った。雷は広東省出身で、1933年より3年間、日本に留学した。詩誌《詩精神》を中心に創作を行い、小熊秀雄らと交流があった。東京では「東京左聯」のメンバーにもなっている。1938年、香港へ行き、39年に洛陽へ、以後、1946年に台湾、48年中国に戻っている。

雷石楡の文学について、また日本の詩人たちとの交流について、これまで日本で発表された彼に関する資料などはほぼ収集できたと思われるが、さらに時間をかけて調査や検討を行っていきたいと考えている。

(3) 中国の文学者、特に戴望舒が香港で行った、詩を中心とした創作活動について考察を

進め、学会発表を行ったが、その際に得られた知見や示唆をもとにさらに研究を続けている。現在までの調査では、戴望舒や施蛰存らが香港で書いた文章でこれまで知られていなかったものの存在は発見できていない。また、上海の「現代派」が香港のモダニズム文学、実験文学などに与えた影響についてはこれまでも指摘されていた（日本では林少陽氏の論考などがある）が、小説だけでなく、詩の創作や詩論に与えた影響について考察しようとしている点で新たな研究成果となったと考えている。

表2 香港の日本占領時期について（簡易版）

1937年 7月7日、蘆溝橋事件。日中戦争始まる。
1938年 10月、日本軍が広州占領。
1941年 12月8日より日本軍が香港を攻撃、18日間の戦闘で攻略、軍政を敷く。
1945年 8月、日本ポツダム宣言を受諾。9月、イギリス軍が香港日本軍の降伏受入れ。

表3 上海「現代派」の作家・詩人たち—日本、香港との関係を中心に（修正中）

1923年、戴望舒、施蛰存、上海大学、25年、震旦大学で学ぶ。
1926年、《瓔珞》旬刊をはじめ。以後、戴望舒、施蛰存、杜衡、「文学工場」として知られる文学活動を行う。
1932年、施蛰存が主編をつとめる雑誌《現代》が刊行され、戴望舒は詩の部分の編集を手伝う。11月、フランスに留学。35年、帰国。36年、穆時英の妹、穆麗娟と結婚。
1936年、戴望舒、卞之琳・孫大雨・梁宗岱・馮至らとともに《新詩》月刊に参加。
1937年、杜衡、香港へ行く。
1938年、穆時英、香港へ行き、《星島日報》に関わる。戴望舒、家族とともに香港に移り、《星島日報》副刊《星座》、《大公報》副刊《文藝》の主編をつとめる。雑誌《耕耘》を創刊。施蛰存、昆明の大学で教える。
1939年 秋、穆時英、非公式に訪日。汪精衛政府の芸術科長として、横山利一、尾崎士郎、片岡鉄兵、林房雄、菊池寛、久米正雄、今日出海らと交流。
1940年、5月、穆時英、中国政府の答礼使節の一員として訪日。林房雄、松崎啓次、武田麟太郎、河上徹太郎、阿部知二、草野心平、今日出海らと会う。6月、上海で暗殺されて死亡。施蛰存、昆明・雲南大学を辞め、11月まで香港に滞在。9月3日、劉呐鷗、暗殺されて死亡（上海）。この年、杜衡、香港で国民党に入る。

1941年、戴望舒、日本軍に捕えられ、域多利監獄に入る。施蛰存、福建に移る。
1946年、戴望舒、施蛰存、上海に戻る。
1948年から49年、戴望舒、上海から香港へ来て療養し、北京へ戻る。
1948年1月、施蛰存、香港を経て北京を訪問。姚蓬子家で馮雪峰と再会、近況を語り合う。杜衡、台湾へ。
1950年、戴望舒、北京で逝去。

「表3」のように、上海「現代派」の文学者は、それぞれに「香港」との関わりを持っている。1937年に杜衡、38年に穆時英、同年、戴望舒も家族で香港に移り住んでいる。穆時英と劉呐鷗は1940年に上海でそれぞれ暗殺されて亡くなるが、この40年には施蛰存が戴望舒を訪ねて香港に滞在しており、つまり過去に上海でもともに活動していた「現代派」の作家たちが、香港において一種の集合離散を繰り返しているとも言える。しかし香港での彼らは、文学的な立場も、さらには政治的な立場や思想も大きく異なっていた。

またこの時期の香港には、葉靈鳳、許地山ほか上海から移って来た作家たちがおり、彼らとの交流の状況は、数はあまり多くないが、残された写真や手紙、文章などから確認できる。戴望舒が香港で仮住まいした「林泉居」およびその周辺の地区はこのような中国から香港に移って来た作家たちが集う場となっていた。

近年、小思など香港の文学研究者がこの時期の文学関連史跡を保存、あるいは記録に留めようという活動に熱心に取り組んでおり、「文学散歩」といった書籍の刊行、また文学講座の一環として実際に現地を訪ねる活動なども行われている。このような動きの中で、当時の文学者、文学活動への思いを表現する作品なども作られているが、戴望舒は日本軍によって監獄に収容されるという厳しい状況を経験した数少ない作家（詩人）であり、その点で後の香港の文学者や文学研究者、読者に与えている影響、思いは特に大きいと言える。（例えば、戴望舒の獄中詩について書いた詩に「和幽霊一起的香港漫遊（組詩選三）」、廖偉裳、《香港文学》285号、2008年9月、がある）。これらの資料なども参照しながら、戴望舒を中心に、1930年代から40年代の香港での文学者たちの関係図を示したい。

また今後はこの時期の日本、中国、香港の文学者の交流、創作が、香港文学史にどのように吸収されて香港の文学が展開されていったのかという視点で1960年代、70年代そして80年代以降の香港文学についての研究を続けていきたいと考えている。小説の分野では、劉以鬯、西西を中心に、詩と詩論に関

しては、也斯（梁秉鈞）を中心に見ていくことにしている。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔学会発表〕（計1件）

西野由希子、「日中戦争期の香港と日本の文学者について—詩人を中心に」、お茶の水女子大学中国文学会、2008年12月6日、お茶の水女子大学（東京）

6. 研究組織

(1) 研究代表者

西野 由希子 (NISHINO YUKIKO)

茨城大学・人文学部・准教授

研究者番号：40262357

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし